

ー金沢大学サテライト・プラザ ミニ講演ー

会場 石川県立社会教育センター 2階21号室

日時 平成14年6月15日(土)午後2時～3時30分

テーマ 「持続可能な観光開発とは ードイツと日本の事例からー」

講師 カロリン・フンク (Carolin Funck) (広島大学総合科学部助教授)

### 1. はじめに

ご紹介にあずかりました広島大学のフンクと申します。よろしくお願いします。

まず1つ、皆様に謝らなければならないことがあります。先程、ドイツの絵がたくさん見られるという期待がありましたが、私は残念ながらスライドを忘れてしまいました(笑)。なぜかという、最近は大体パソコンに頼って学会に出て、そこに必要な



プレゼンテーションが入っているので、それを出します。そして後半の日本の話もちょうどこれに収まっていますが、ドイツのスライドは最近いろいろ撮ってきているものをまだ読み込む時間がなくてここに入っていないので、スライドで持ってくる予定でしたが、いつもこれですから忘れてしまいました。だからドイツの写真は、申し訳ありませんが数枚しか……。あとは、私の日本語でどれだけ具体的にドイツの事情を描けるか、または皆さんの想像力に頼るしかないのと、ぜひ近いうちに皆さんドイツに旅行してください(笑)ということでカバーするしかありません。

今日のお話は、プリントを2枚ほど配りましたが、まず、それを少し見ていただきますと、文章の部分と数値の部分があります。数値の方は後半になるかと思いますが、文章の部分を見ますと、大きく1～5まであります。それが主に話の流れで、最初の1で、持続可能な観光開発というのを理論から少し考えたいと思います。話題提供というか、最近よく、特に「サステイナブル (sustainable: 持続可能)」という単語はよく耳にしますので、それを観光について考える場合はどのようなことなのかということをもっと考えたいと思います。

2番目は主にスライドでやる予定でした。山の観光地、海の観光地、ドイツの事例で見る持続可能な観光は、少しパソコンに入っているスライドと、あとは話で補いたいと思います。

3番目の「スローツーリズム」は私が勝手に作った言葉ですが、最近NHKでスローライフという番組をよくやっており、これはおもしろいから、それを観光に持ち込んだらどうということだろうと思って勝手につけたものです。

4番目は、データで見たドイツと日本の観光の違いです。ここは主に観光客の行動で、観光客は旅行をするときにどんなことをするか、どの回数、どの日数でみんな旅行するかなど、そういうことを少しデータを見ながら比較したいと思います。

最後に観光地域としての瀬戸内海を、総合的な視点、総合的な、あるいは持続的な観光開発から考えると、瀬戸内海にはどのような可能性があるかということ、主に2つの島を中心に少し考えたいと思います。

## 2. 持続可能な観光開発

最初は、理論の話から入りたいと思います。持続可能な観光開発ということになります。が、持続可能といわれて、きちんと頭の中でそれが内容に結びついているという人はちょっと手を挙げてください。持続可能というのは何だと、定義は聞きませんので、状況を見たいだけです。持続可能といわれたら、これは何なのかある程度わかっている方。何人かいますね。サステイナブルだったらどうでしょうか。サステイナブル、片仮名でもいいですし英語でもいいですが。ほぼ一緒ぐらいですね。どちらもあまりなじみがないというか、聞いたことがあるけどいったい何だろうという概念でもようなある気がします。

ご存じだと思いますが、持続可能とか英語の sustainable という単語を使うようになってきたのは、リオで初めて環境問題を世界的に話し合った1992年からです。もちろん、持続可能というのは、あとで詳しく定義しますが、基本的に、例えば将来にまた利用できるように現在の資源を全部使ってしまうとか、そういう環境への配慮などを含めていますが、観光の場合を見ますと、90年代に入る前からもうそのような発想がありました。つまり、どうやって観光地で観光の資源になっている、例えば自然を壊さないような開発を進めるかとか、そういう問題自体が以前からあります。

ヨーロッパの場合ですと、そういう考え方をどう言ったかということ「ソフトツーリズム」、柔らかい観光、あるいはやさしい観光というような言葉がありました。ソフトツーリズムとかそれに関連した概念は80年代、今から20年前からヨーロッパで広まってきました。日本語ではそれらの概念がそのまま外来語として入ってきたり、あるいは訳されたりします。

このような概念の登場の背景には、観光客の増加による自然破壊が目立つようになったこと、そしてもう1つは、特に発展途上国において、国際観光による社会的な影響が必ずしも望ましくないということが認識されるようになった事情があります。それで、観光客による自然破壊が課題になったことから、環境、自然に対するやさしさ、そして後者から、地元住民に対するやさしさ、配慮の必要性が意識されるようになりました。ですからソフトツーリズムという概念は、すでに自然に対する配慮で住民に対する配慮を含めていました。

90年代には、このソフトツーリズムのほかに、グリーンツーリズムとか環境にやさしい観光とかいろいろ単語がありましたが、それらが大体、持続可能な観光という言葉に置き

換えられてきます。現在、そういう専門書を見ると、全部サステイナブルツーリズム、あるいは持続可能な観光です。

イギリスで、2年ほど前に『観光地理学』という専門雑誌がスタートしましたが、その第1号のテーマは「持続可能な観光」というものでした。そこから考えても、地理学、特に観光地理学の中で、そのサステイナブルツーリズム、持続可能な観光は非常に重要なテーマであるといえます。

また、少しさかのぼって、先程言いましたソフトツーリズムの発想は何だったかということ、を少しだけ考えてみたいと思いますが、ソフトツーリズムが単語として出てきたのは、ある学者がハードツーリズム（堅い観光）に対照したためです。ハードツーリズムは何かというと、大衆観光、時間の余裕がない、高速交通手段を利用する、予定が決まっている、自分の生活方式をそのまま旅行先に持ち込んでいく、主な行動が楽で流動的で見学が中心、その目的地について勉強もしていないしその言葉も習っていない、地元に対してどちらかということを見てあげるといふ優越感がある。それによって、具体的に現地に行っても買い物はするが、どちらかということとお土産を買うぐらいで、あと記念写真を写して、大衆で移動するのでかなりうるさいというようなマイナスな面もあるというのがハードツーリズムです。

それに対してソフトツーリズムは、どちらかということと少人数で、時間をかけてゆっくりと回っていく。しかもあまり速い交通手段を利用しない。自分の行動を自分で考え、行く前にきちんと準備して、その目的地について情報を集めたり知識を集めたり、場合によっては言葉を習ったり、学ぶことを楽しむ。物を買うといっても、決まったお土産を買うのではなく、だれのために何を買うかとかをきちんと考えて、写真よりも例えば自分で絵を描いたりとか、丁寧に写真を写したりなどして、地元や環境に対しての思いやりを持つ。全体的に見ると静かな形態だといわれていました。

つまり、これはサステイナブルという単語が出てくる前の発想ですが、ここで重要なのが、観光地、あるいは観光産業はどうであるという面ももちろんありますが、観光客は何をするかということも含めているというポイントが重要だと思います。

持続可能という単語を出して定義してみたいと思います。プリントで、英語で carrying capacity と書きましたが、日本語にすると耐久収容能力だと思います。持続可能な開発、あるいは持続可能な観光というのは、ある場所の耐久収容力を過ぎない。ある場所の利用にあたって、資源、観光客の満足、地元の社会・文化・経済にマイナスの効果をもたらさない程度をいいます。

それがさまざまな面を含めています。物理的には、自然や建物が傷まない程度。これはよく入場制限などにつながりますね。例えば山の頂上にどうしても観光客が集中します。たくさん人が歩くと、花や土が傷みます。そうすると、その山の頂上のキャリングキャパシティを過ぎていくということになります。ですからそのような現象を避ける。

経済的に見ると、観光機能によってほかの地元の活動が制限されない程度をいいます。

よく事例として出てくるのが、ある地域で観光客が多い場合、その渋滞によって地元の人が自分の仕事の場にたどりつけないとかということです。そうすると、観光という経済活動がほかの経済活動の障害になっている。

社会的に見ると、地元住民の観光客の行動に対する忍耐力を過ぎない程度。これはどちらかというとい国際観光の場合よく課題になっており、例えば欧米の旅行者がイスラムの国へ行くと、やはりその洋服の着方が全然違うので、それが地元の人にとっては非常に失礼な服の着方などになります。そういう面をいいます。

心理的には、観光客にも最低限の満足を与えることが重要です。日本の国内にもよくある問題だと思いますが、ゴールドenウイークの場合、広島から何時間もの渋滞の中に入って行って宮島にやっとたどりつく。そうになると、もう二度と宮島に行きたいとは思いません。そのような現象だと思います。これは、マイナスな影響を避ける限界をいいます。ですから、これはある意味ではマイナスな定義。このような悪影響、このようなことを避ける。それは、どちらかというとい観光客を何らかのかたちで制限する必要性に結びつく場合があります。

もう少しポジティブないい面を見ますと、持続可能な観光開発の特徴として挙げられるものが次の5点です。まず生態的な面。景観保全などを優先している、そして長期的である、戦略的な環境の管理を行う。そして人間的な面。つまり地元の住民の決定権を尊重する、観光開発の決定過程の中に住民の声がきちんと入っている、その過程が民主化されている。そしてもう1つの特徴は、質的な観光政策の効果が測れる指数を導入すること。全体的なコンセプトに沿った開発の実現。これらのことが要求されます。

持続可能な観光とは何かという定義自体がたくさんあります。それをここでいちいち挙げるときりがないので、古いものでソフトツーリズムの定義を1つだけ取り上げますと、すべての階級の人々の多様な要求を、充実した観光施設と安定した自然環境において、そして地元住民の利害を配慮しながら最適に満足させるということといえます。つまり、自然環境の視点が入っている、地元住民の視点が入っている、しかしやはり観光客の視点も入っているということが重要だと思います。この点について、また後半の方で少しだけ触れていきたいと思っています。

観光について考えると、特に現在の日本を見ますと、ほかの経済的な活動がとどまっているとか、過疎地域とか、そういうどちらかというとい経済的な発展があまり進んでいないところでは、とにかく観光開発に期待をかけているところが非常に多いです。それは日本だけの特徴ではなく、世界的にそうだと思います。つまり、観光というのは人が中心地からそういう周辺の地域に動いていくのですね。都市から海へ行く。都市から山へ行く。あとは違う国へよく行く。そうすると、観光を通じてある程度収入が分布されます。経済発展が進んでいるところからそうでないところへ人が移動して、そこへ滞在して、いろいろな物を買ったりすることによっての経済効果があります。

経済的な効果は、経済構造や開発のペースによって異なりますが、外国の場合は外貨の

獲得、あるいは収入効果、雇用効果、地域間の均等が挙げられます。地域間の均等というのは、経済力が集中している中心部の住民の観光支出によって、都会から経済基盤の弱い農村地方へ収入が流れるということです。それは日本のような先進国の中にも起こっている過程であり、国際的にも北から南へというような動きで見られます。

しかし、観光客の増加と観光地の拡大に伴って望ましくない影響もたくさんあります。それらを短くここで、観光の自然環境への影響と観光の文化への影響としてまとめてみました。1つは環境汚染です。数値で測るのが非常に難しいのですが、この場合は交通による問題が多いです。観光というのは移動を必ず含みますから、排気ガスによる大気汚染、あるいは排水やガソリンによる水源の汚染。例えばモーターボートによる水源の汚染、あるいは交通による騒音。このような直接の交通による汚染があります。

もう1つは、風景の破壊です。つまり、観光客が泊まるため、あるいは車を止めるための駐車場、あるいは食事をするためなどに建物をたくさん建てます。このような建物によって、自然な風景が減少して、自然の自由な利用が制限されます。例えば地中海に行くと、海岸沿いにずっと別荘地が並んでいて、一般の人は海岸に出られず、たまに間に海水浴場があって、そこではだれでも海に出られるということになっています。それは海という資源を見る場所を奪われていることになり、海岸の景観の破壊にもなります。

または植物層、動物層の破壊、生態系の破壊、動物生活環境の悪化などが挙げられます。もちろんここは程度の違いがありますが、案外、これはソフトであるとか、自然にやさしい観光、レジャー活動であろうと思っているものでもこのような影響があり、例えばロッククライミングは人が自然に入って自分の体を動かしてやっているだけなのに、普通は人の入らないところに入ってしまいうので、鳥の巣に影響があったりなど、動物層に悪影響を与えているようなものがあります。

ですから、大衆観光だけが環境に悪い影響を及ぼしているわけではなく、ほとんどすべての観光やレジャー活動は、何かのかたちで環境に影響を及ぼしています。それをどこまでいいとしているか、その制限をどう作るかというのが、観光地でしなければいけない判断です。

社会や文化への影響としては、1つは生活習慣の変化が挙げられます。それはどちらかというとい国際観光の方が多いです。地元の習慣と文化が、元の意味を失ってただの見せ物になってしまいます。または観光客と住民の行動の違いから誤解が生まれて、最悪の場合はその両方の間の衝突を呼び起こす、問題が起こる、けんかが起こるなどもあります。

そして開発が外資中心に行われているという場合は、特に国際観光の第三世界の場合は深刻な問題ですが、例えば国際ホテルチェーンがある場所でホテルを造っても、そこから地元に入ってくる利益の部分が非常に少ない。大体半分が漏れて、その会社の本部へまた戻ってしまう。ですから、観光客が現地へ行ってそこでお金を使うという、先程言いました観光の効果ですが国際観光の場合、特に第三世界の場合は、目的地から発源地に戻ってしまうお金は大体半分ぐらいといわれています。それはもちろん、国や地域によって差が

あるといえます。

このような影響を配慮して、どのような対策ができるかという点、かなり広い幅にわたります。それをあとで少し具体的に説明しますのでプリントには載せていませんが、ここで少しだけまとめますと、基本的に行政が取る仕組み、業者が取る仕組み、観光客が取る仕組みで方針が考えられます。行政側の場合は、どちらかという点規制、計画、土地利用計画などが主だといえます。特に土地利用に対する政策、開発の規制、あるいはゾーニングです。ここまででは人が入っていい、ここは人が入っていいが建物を建ててはならない、ここは建物をここまで建てていい、というように、観光地とその周辺を区分して規制するような政策をよく取ります。特に自然保護地域の場合、例えば国立公園の場合などはそのようなゾーニングを行います。

そして住民の権利と生活習慣を守るための政策と、あとは交通政策が考えられます。交通政策の場合は、公共交通手段の開発を進めるのが観光地、あるいは観光地域の行政の一つの重要な役割だといえます。

業者、つまり観光産業、観光客に宿泊施設やスキーリフトなどを提供する側としては、まずそういう行政の仕組みに協力すること。そして施設を建てるときの建設段階で、環境あるいは地元社会をどの程度配慮するか。例えば地元の人をどれだけ雇うとか、材料としては地元の材料を使うとか、そして運営中の配慮です。運営中の配慮としては、最近、環境にやさしい運営は経営にもいいといわれてきています。日本でも、最近ビジネスホテルで歯ブラシを出さないとか、シャンプーは1個ずつではなくて大きなボトルに入っていると、たまにはタオルは2日続けて使ってもいいのなら掛けて、洗ってほしいときは下に落とすという、ヨーロッパの場合はもう一般的な仕組みですが、そういうことをやります。ですから環境への影響と経営への影響を結びつけることです。

観光客の側としては、ある程度、居住地での旅行指導、あるいは居住地での体験コース、外国語のコースというようなことが考えられます。そしてもう1つは、観光の環境への影響、地元への影響を考えると一番問題になっているのは、観光という行動は非常に固まって行く。日曜日になるとみんな一度に行くというように、シーズンが激しいのです。ですから、日曜日には300人が行く、しかし普通の日には10人しかいない。それでも一応300人のための駐車場がある。その駐車場を造るために、たくさんの自然を舗装してしまう。そして、その日に排気ガスが非常に多いというようなことを考えると、観光行動のピークを減らすことも非常に重要な政策です。

ドイツの事例からいうと、ドイツの場合、州によって夏休みの始まる時期が違います。それは観光地に行くときの渋滞、あるいは全体的に観光地の渋滞を防ぐためです。それは一方、経済的にも影響して、それによってシーズンが長くなるのです。みんなが同時に休むと、夏休みは6週間なので6週間の夏のシーズンしかありませんが、ドイツの場合ですと、一番早い州から一番遅い州までは3か月弱、2か月半ぐらい休みがあるのです。ですから、いつもどこかで休みがある。休みの柔軟政策によって観光の持続性を進めることも、

一つの重要なポイントだといえます。

この持続可能な観光開発とは何かという理論の部分は、一応ここまでにしたいと思いません。

後半で瀬戸内海の話をするときは、この概念、つまり持続可能な観光開発というのは環境の視点を取り入れる、住民の視点を取り入れるということを基本に考えるのですが、それをもう少し日本の事情に合わせて、瀬戸内海を事例に考えたいと思います。

### 3. 山の観光地、海の観光地、ドイツの事例で見る持続可能な開発

これからドイツの観光地の具体的な話をしたいと思います。スライドがないので、せめて文字を少し入れてみました。山の観光地と海の観光地を入れましたが、もちろんドイツにも都市の観光地などがあります。しかしこの持続可能ということを考えるうえでは、やはりまず自然がある場所でなければ話が具体化しにくいということと、あとはドイツの伝統的な夏休みの旅行は山に行く、または海に行くというようなことなので、ここで山の観光地と海の観光地を取り上げたいと思います。山の方の観光地は、あと2枚だけこちらの機種で写す写真もあります。

山の観光地の特徴を見ますと、伝統的なかたちは長期滞在です。昔は3週間、4週間だったのですが、今は年に1回長い旅行をするのではなくて、年に1回は長い旅行はしますが、それを少し短くして、ほかに短い旅行を入れるというような方向に、少しドイツの旅行形態が変わってきています。ですから、夏の旅行は昔は3～4週間、今は平均で大体2週間です。その日本との違いについて、あとで少し触れます。

それは1か所で滞在して、そこから日帰りであちこちに行ったりします。例えば私が住んでいるフライブルクという町は、黒い森という山の麓にあります。黒い森は昔から保養地で、夏に家族で旅行で行って滞在する場所です。もちろんドイツの夏なので、日本のようにずっと暑いというわけではなく、間に雨が降ったり寒くなったりしますので、そのような日は山の下にある町に降りて博物館やショッピングに行ったり、あるいは映画館に行ったりするようなパターンが昔のドイツの家族旅行の伝統的なパターンでした。しかし、日本でも同じことが今起こっていますが、ドイツの場合はだんだんと国内の旅行が減ってきています。今はたしか国内は29%で、長い旅行の7割は外国に行きます。それは30年前、70年代にはまだ半々ぐらいでした。戦後、ずっと外国に行くことが増えてきています。ですから国内の観光地にしては、まずその山の観光地は客が減っているのが現実です。

山の観光地といいますと、ドイツの場合はアルプスの観光地と、黒い森といって1500メートル、あるいは1000メートルあたりぐらいの山が南部にいくつかありますから、そういう地方を主にいます。ドイツ北部は山がありませんので、基本的に北部の人が南部の山に行くというようなパターンです。

こういうところで長く滞在すると、ホテルに泊まる人ももちろんいますが、伝統的な宿泊施設は、貸部屋、または貸別荘、あるいは貸アパートです。貸部屋というのは本当に部

屋だけがあって、あるいは民宿のようなかたちで、そこで朝ご飯も食べられるようなかたちです。貸別荘になると、やはり台所などもついていて、ある程度独立した生活ができます。

最近、どちらかというとな貸別荘の方がプライバシーが守られる、自分の生活ができるということで人気があります。ですから観光地の中でも、小さいけれどもマンションのような建物が少し増えてきています。そのような場所で主に何をするかというと、またあとで数値で見ますが、山歩きとサイクリングです。サイクリングはドイツで非常に人気を得ています。あるいは湖があれば泳ぎに行くとか、大体こういう山の観光地にはプールもあります。

観光地にとっての経済的な持続性、つまり観光産業というものが成り立つ持続性を考える場合、今一番課題になっているのが客の高齢化です。例えば黒い森の場合は、客の半分以上が50歳以上です。ですから、これは伝統的なドイツの旅行のかたちであり、それで育ってきた人たちはそれを続けているのですが、新しい人はそんなに行かないということが事実です。

そこで、それにどのように対応するかということになると、ハードの開発はもちろんあります。1つはプールを充実させて、いろいろな子どもが遊べるような施設などをつけるようなプールの開発とか、小さな遊園地。どちらかというとな自然系が多いですね。動物がいたりするものを開発するところもあります。しかし、どちらかというとなソフトを重視しているところが多くて、例えば2週間滞在しますと、家族で滞在する場合はその2週間で親のやりたいことと子どものやりたいことが違う。それにいつもお互いにつきあわなければいけないと、どちらかが退屈する。そうすると町で、やはり子ども専用のプログラムを出すところが結構あります。それで、そこへ朝行って子どもを預けて親は町に出たり、あるいは久しぶりに夫婦水いらずで山に行ったりなどして、子どもたちはほかの子どもたちと一緒に1日遊んでいる。何をして遊んでいるかということ、プログラムをどのように組み合わせかというのはもちろん町によって違いますが、大体のドイツの町にいろいろなクラブがあります。例えばアーチェリー、乗馬などの市民のクラブ、そういうクラブにボランティアで頼んで、1日担当してもらう。今日は乗馬とか、あるいは今日は絵はがきを作るとか、そういう仕組みを取っている観光地も結構あります。

家族にやさしいという観光地に国が出している賞があります。そういうプログラムが充実しているところ、または施設が充実しているところが、「家族にやさしい」というブランド名がもらえる。そうすると客の誘致に役立ちます。

そしてもう1つの最近の方向としては、有機栽培に取り組むということですが、それはあとで写真で少し見たいと思います。

ドイツでのそういう山の観光で、おそらく日本で一番有名なのが、この「農家で休暇を」というかたちです。その内容は、あとでスローツーリズムのところの説明しますが、「農家で休暇を」というのは、写真で見るとこの建物がそうですね。ですからここに滞在して、



これは農家ですのでここにいろいろ動物がいるので、子どもたちはそれと遊んだり、その動物の手入れはどうするかということを知ったりということが出来ます。

有機栽培を取り入れるということですが、あとでまた見せますが、そういう山村や農村の風景があります。例えば日本でいいますと田園風景がありますね。田園風景といえますと、日本では段々畑などがあります。けれども、それを今は大体、耕地整備して段を外して、田んぼも大規模化を図っていきます。そうすると、見た人にとってはおもしろくない景色に変わってしまいます。しかし経済的な面から考えると、そうするしかないという面が多少あります。

そういう問題は、ドイツも同じようなものがあります。ドイツの伝統的な農業といえますと家畜です。酪農もあれば肉をつくるための家畜もありますが、今、ドイツの北部に行くと、牛は外に出ていません。建物の中に大体並んで立っていて、そこで生活しています。それで今の草地にはたくさん花が咲いています。しかし、そこにもっと草を取るために化学肥料をやると、草の種類が減ります。このように、現代的な農業に変わっていくと、観光客が求めている景色がなくなってしまいます。

そこで、特に山間地域はどちらかというとな農業の効率が悪いので、どうせそれほど大量生産もできないので、では有機栽培に切り替えた方が景観にもいい、そして観光客に新鮮な、しかも健康な食べ物を提供できる。もともと保養地としての性格のあるところですから、そういう健康を求めるといふ人も多いです。

ドイツのアルプスの1か所の村全体、農家の80世帯でそういう自然農業に切り替えたところもあります。ほかの自然農業の特徴を取り上げると、例えばチーズづくりがあるとか、直接販売を行う店によってまた客が集まってくる、あるいは、このように花の種類がたくさんあり、きれいな景色になっている。ということで、最近の山間の観光地域の一つの動きとしては、積極的に有機栽培を取り入れる、それを観光客にアピールしていく。それは景観の面もあれば、健康な食べ物という面もあるということが一つの傾向としてあります。

先程言った、村全体でそれに切り替えたヒンデラング (Hindelang) という町は、それでかなり有名になってきました。農業にとどまらず、町全体で自然保護にいろいろな面で力を入れるようになってきて、例えば宿泊施設を予約する場合、車ではなく電車で行く場合は割引があるというような、車はできるだけ町に持ち込まないような方向に動いていき、あるいは町が駅と村を結ぶ、少し離れているのですがバスを走らせたりするというような仕組みもあります。

もちろん、ドイツもレジャー活動が多様化してきます。ハイキングとサイクリングだけではもう客が集まらないので、最近、山間地域でこのようなラフティングなどもやります。よく見ると、これもそれほど若い人でもないですね(笑)。これも、やはりある程度中年層を相手に出しているものかもしれません。しかし、それもある程度ソフトの対応ですね。どうやってその自然資源を利用していか。

今度は海の方を少し見たいと思います。海の観光地といいますと、そこも保養地として始まりました。しかし、どちらかというとも都会の人が夏の間過ごし、そこにまた都会的なものを求めたというのがヨーロッパの海岸地域の発信でしたので、自然よりも海沿いにブルムナードがあり、そこにいろいろな店があり、外で座ってコーヒーが飲めるというようなイメージの方が強いと思います。

ドイツの場合は、海があるのが北部です。ですから北海とバルト海、私が子どものころに泳いだところでは、おそらく日本人はだれも泳がないでしょう。北海の温度と比べると、瀬戸内海は3月～10月、11月まで泳げます。実際、私は5月から泳いでいます。そのような状況です。

北部は平地です。平地ですから、そのまま干潟になっているところが非常に多いです。干潟というのは生態系として非常に敏感ですから、一部は国立公園の指定も受けています。そこは鳥がたくさんいますから、一部を人が入れないように区切ったり、ガイドがついていなければ入れないようなところをつくったりしています。

普通の海のリゾート地に行くと、主な行動は海水浴、日光浴、あとはビーチの散歩です。ドイツの、特にバルト海の方に、8～9キロも続くビーチがあるので、それをずっと歩いていくというのが伝統的な趣味です。

旧東ドイツの海岸の場合は、もちろん旧東ドイツも、ドイツ人ですからよく旅行しました。ベルリンの人はその海岸線に行ってそこに滞在しましたが、西ほどではありませんでした。そうすると、統一してからは、その地域はまだそんなに手が加わっていませんでした。一部は旧東ドイツの社会主義で利用していた建物などが残ってはいましたが、それほど開発はなかったのです。では、これからはどうするかということになったところで、1991年に統一しているので、すでにサステイナブルという言葉が出てくる時代です。旧西ドイツの方の海岸を見ると、島の方ではかなり干潟に囲まれていることもあって自然保護に力を入れています。本土の海岸線沿いのところだと、かなり都市化しているリゾート地が多いです。自然海岸もありますが、海岸自体にホテルが立ち並ぶ風景もよく見られます。

特に旧東ドイツの場合は、一つの大きな島があります。リュージェンという島ですが、そこはもう開発の方針としては海から50メートル離れているところまでは建物を建てない。そこは自然海岸とするという原則を作りました。新しく開発した建物は、とにかく海から避けて、海から見えない、少し入ったところに大体、林や森林がありますので、その中にある程度隠すような方針に持っていきました。

このような海岸です。その中に、特に自然資源の豊富なところがあります。今立っている場所は、旧東ドイツの地図で見るとこう見えます。しかし、実際を見るとこのような風景です。この島は旧東ドイツの地図にはなかったのです。なぜかという、それは旧東ドイツの統一党幹部の保養地だったからです。秘密でした。ですから、あったのに地図にはなかった。しかしそれほど大勢で行っているわけでもない。そこで狩りなどをしていたの

で、どちらかというと自然がそのまま残っているのです。今はもうこの島には泊られません。近くから船で渡ってガイド付きで中を回り、自然の生態系などを見ることができるような、いわゆる持続可能な自然型の観光の方に少し変わってきています。ですからある意味で、一時的にはこの支配層のためにあった、そういうところこそ、今は自然を中心にした観光の目玉になっている。それはここだけではなく、ほかにもたくさんあります。

リュージェン島の隣に、ヒデンゼーという小さい島があり、昔から画家と文学者が集まりました。例えばトーマス・マンもそこで時間を過ごしましたが、この島にはもう全然車を入れません。フェリーで着くと、このように馬車に乗るか、自転車で動くか、歩いていくか。本当に小さな島ですので、一番北部から南部まで自転車で30分で全部走れます。しかし、これは本当にスライドを忘れて申し訳ないのですが、非常に微妙な風景になるのです。家がある。しかし車の道がないから、その家は草地の中に建っている。そういう本当に独特な風景があります。

この島の場合、小説にも出てきますし、やはり有名ですから、非常に人気があります。それでキャリングキャパシティ、どこまで観光客を入れられるかというのは、ある程度フェリーの回数で決まっているのですが、やはり入りすぎていって、夏の週末に行っても人が多すぎて楽しくない。そしてごみの問題などが出てくる。

もう1つは、土地利用計画がこの島にはない。旧東ドイツにはそれがなかったもので、それを作らなければいけないのですが、やはり島の人たちは自分の土地を売ったり別荘を建てたりしたいのです。特に旧東ドイツは経済状況が苦しいので、方法としてはそれしかありません。島の人たちが議会に座っていますから、自分を縛るような土地利用計画は絶対に作らない。このような問題を、今、この島は抱えており、一応建物をどのように建てるかという規制があって高層ビルなどは建てられないのですが、新しい建物で古い建物とマッチしないものが非常に増えているのが現実です。

これと同じ、その隣の大きいリュージェン島の一つの特徴ですが、今、ずっと持続可能な観光のお話をしてきましたが、そうではなく、違う遺産もあるのだということはこの写真で示したいと思います。

これはリュージェンにある、ナチスがつくった観光地です。戦争中につくり、この建物のこのような風景が4キロも続いています。中には、1万人が同時に泊られます。つまりこの建物は、海があればいい、建物は箱形でいいというような大衆観光の原型です。ですから、海がその前にあるからそれを楽しめばいい、あとは人がたくさん1か所に行った方が合理的である。運ぶのも合理的だし、会社ごとそのまま行って、10日間行ったらまた帰るというような非常に合理的な仕組みであった。この遺産がそのリュージェン島に残っているのです。そして、この建物は壊せない。コンクリートで非常に丈夫で、一部壊しかけたのですが壊せないのです。ですから、これをどうするか、これをどうやって持続可能な観光にもっていくかという課題を今ここで抱えています。これは少し余談ですが。

以上で山の観光地と海の観光地の話を終えて、最後に1つだけ。

先程言いました自然農業に切り替えた村は、このようなところですよ。これを見ると、草地在非常にでこぼこして柔らかい感じで、見るときれいですが非常に草刈りなどが難しいのです。ですからやはり耕地整備と同じように、ある程度きれいな斜面などにした方がいいのですが、景観としては望ましくないのです。

村全体の風景はこのようなかたちです。ですから、ほとんど周りは畑や牧草地で、アルプスの麓にある村です。これだけでした。

#### 4. スローツーリズム

休憩に入る前に、ドイツの話がある程度まとめたいと思いますので、プリントのスローツーリズムのところを少しだけ見てください。スローツーリズムというのは、時間を使って旅行をするという意味ですが、ここで言いたいことは、その一つの原型としては、先程も少し出した「農家で休暇を過ごす」ことです。農家で休暇を過ごすというのは、前からやっていることなのですが、違いは国からお金が出るということです。目的は、農家の補完収入を与えることです。それで、先程言いましたように、農村環境の保存と、都市住民に農村の生活を体験できる場を与える。特に子どもにはそうですね。

ドイツで、戦後わりあいすぐ、1964年に、バイエルン州というところから始まって、現在ではそこで2000件の農家が加盟しています。基本的に農村で定住して、農業を営んで、8ベッド以下の小規模な宿泊施設を営む人に対しては、その州、あるいは国から補助金が出る。またはいろいろな教育プログラムがある。例えばどうやって農家が民宿を営むか、ほかの農家民宿との交流などです。最近、少し規模を拡大して15ベッドになっています。しかし、これは補助金を受けている対象になっている農家をいっているのです。マーケットとしてはわりあい小さく、それを利用しているのは全体のドイツの観光客の2~3%ぐらいです。ただ、安くてゆっくりと自然に滞在できるというかたちとしては、日本の方からかなり注目を浴びています。

もう一つの自転車を利用した旅行のところを見てください。これは最近非常に増えてきている方法です。基本的に、ドイツはヨーロッパで一番自転車道が整備されており、レジャー活動としても、ここに書いてあるように、散歩に次いで今2位になっています。ですから、ドイツ人は昔はよく歩きましたが、今は自転車で移動します。一応どれだけの自転車旅行があるかというのをここに載せましたが、基本的に自転車での旅行というのは全国でできますが、いくつかの地域に集中します。一つは、先程言ったリュージュン島です。基本的に北部の方が平地なので多いです。南部になるとドナウ川沿いの旅行が非常に人気があります。

そういう旅行をパックで売っている専門業者があります。それもかたちがいろいろあり、ツアーやグループで移動するものもあれば、個人でただ自転車を借りて、荷物を宿から宿へ運んでもらい、地図をもらってそれに沿って自分で動いているというようなパックもあります。または、自転車を自家用車に乗せて、それを長い滞在する目的地まで持っていき、

そこから自転車で旅行するという人も非常に多いです。自転車道としては、専用自転車道とか、ハイキングコースを利用しているものとか、林道、農道を利用したもの、廃止された鉄道の路線を整備して自転車道にしているものなど、種類がたくさんあります。

それが地域にどのような影響をもたらすかということ、広域的な地域づくりが必要になります。歩くよりも動く範囲が広いので、いくつかの町が協力しなければ、ルートの手配などが成り立ちません。宿泊施設もある程度対応しなければいけません。自転車置き場を整備するとか、情報を提供するとか、ある程度のスポーツですから十分な朝ご飯を提供するとか。

それで、基本的に自然や地域性を重視した旅行形態だといえます。車でだと、ドイツ人は旅行するときに、出発する前に自分のスーパーでたくさん買い込んで、それを持って行って現地で食べるというのが一般的なパターンです。そうすると、地元にとってはそれがあまりおもしろくないのです。しかし、自転車だとそんなに持っていけないので、どうしても地元で買わなければいけないということなので、やはり地域性をもっと感じるような旅行形態だといえます。

以上、前半が長くなってきましたが、これで一応休憩に入りたいと思います。

## 5. データで見たドイツと日本の観光の違い

今、休憩のときに、この「持続可能な開発とは」という質問に対しての答えはこの講演で出るのでかと聞かれました。前もって言いますけれども、出ません(笑)。先程も言いましたが、持続可能な開発とは何かというのは、まず原則がいくつかあります。それは世界的にいろいろ国際社会の中で議論されていて、そういう原則は次の世代の資源を壊してしまわないとか、もう少し具体的に見ると、できるだけ新しい土地を開発しない、土地の再開発、あるいは再利用、あるいは複合的な利用を目指すとか、あるいは資源の利用をできるだけ減らすなど、そういう原則がいくつかあります。

それを観光に持ってくると、これはいい、これはあまり望ましくないという判断ができるのですが、それはやはりその地域によって違い、観光の形態によってまた違うので、ここでこれがいいという答えはとても出せません。そういう答えは、やはりある観光地、ある場所で、かかわっている人たちの間で話し合っただけで出さなければ、その答え自体に持続性がないということがいえると思います。

後半では主に瀬戸内海のお話をしますが、その前にざっとプリントを見ていただきたいです。とにかくざっと数値を出してしまっただけで、これを全部説明すると一つの講演になりますし、数値はそれほどおもしろくないので詳しくは説明しませんが、いくつかの日本とドイツで違うポイントを重視したいのです。そのポイントをもとに、ドイツの方が持続可能な観光が実現しやすい面があるといえます。または持続性と関係のない点も中に入っているのですが。

こちらの小さいプリントで、まず旅行の方を見ますと、旅行の参加率が載っています。

参加率とは、住民の何%が旅行するかということです。それはドイツの方が多いです。そのこと自体は持続的ではない。旅行というのはしないのが一番持続的だということがまずいえると思います。ドイツの中でも議論になります。緑の党はときどき、休暇旅行を制限すべきだとか、そういうとんでもない提案を出して大騒ぎを起こしています。

おそらく一番違いがはっきりするのが、この大きいプリントの1 aの真ん中、旅行日数のところです。左は全部ドイツで右は日本ですが、ドイツの場合は一番下に書いてある平均日数が全国の場合16.1日。日本の場合ですと、国内は1泊が半分以上、平均が1.74泊。そしてまだ計算していませんが、海外の場合は平均は4～5泊ぐらいです。

そうすると、長い旅行をしてぐるぐる回ると全然持続的ではないですが、1か所に滞在した方がそのところに経済的な効果もある。とにかく移動が少なくすむという面で、少しはいいとはいえませす。ただ、もちろん短い旅行になると距離が違いますから、そこはまた、必ずしも交通移動の量が減るというわけでもありませんが、持続性と関係なく観光地の構造を考えると、日本とドイツの一番大きな違いは、やはりこの旅行日数です。長い旅行をするか、しないか。

あとは旅行先での行動で、例えば下の2 bのドイツのスポーツを見ると、水泳、これはプールと海と湖を全部含みます。水泳とハイキング、ボールゲームとサイクリングが主です。日本の場合ですと、自然の景観を見るという何だかよくわからないようなところと、あとは温泉、名勝を見るという、どちらかというところ見る観光が主なのですが、最近だんだんと「する」観光も増えているといわれています。

交通手段、次の裏の方になりますが4番目の表を見ますと、ドイツの場合はマイカーと飛行機が主です。ですから、それは持続的ではありません。日本の場合、減ってはいますがJRで旅行する人、あるいは貸し切りバスなどで旅行する人が多いので、マイカーも多いのですがドイツほどではありません。持続可能な開発の一つの原則は、マイカー、自動車の利用を減らすということです。そこから考えると、ドイツ人の旅行行動は決して環境にやさしいとはいえないと思います。

あとは参考までにご自分でいろいろ見ていただければ、いろいろな細かいところにおもしろいところがあります。例えば日本では、17歳あるいは19歳までの若い人はあまり旅行しませんが、ドイツはそれが非常に盛んです。家族旅行ですね。そういう細かいところで、またいろいろおもしろい面があります。

ですから一番基本的な違いとしては、旅行の回数、日数、旅行先での行動。あとはプリントには出していませんが、利用する宿泊施設です。先程言いましたように、ドイツの場合は長い滞在をしますから、やはり貸別荘などが結構多く、それは町にしては、特に小さな村などになると、そこに夏の間の3か月でも人口が何倍にも増えると、それによって立地できる店が増えるのです。ですから、パン屋さんがあってもスーパーがないような町に、パン屋さんが2つ、スーパーが1つあるというのは、観光客が来るからだというような地域への影響はあります。

## 6. 観光地域としての瀬戸内海

これから少し日本の話に入りたいと思います。私は、日本へ来てからずっと瀬戸内海の周辺で暮らしていますので、瀬戸内海の話をしたしたいと思います。ここでサステイナブル、持続可能な、という単語を使わず総合的なという単語を使いますが、その理由はあとで言います。瀬戸内海の総合的な開発を考えると、どのような方向がこれから望ましいのかということのを少し考えてみたいと思います。ここでは瀬戸内海でいろいろな観光とレジャーの発展に取り組んでいるところがあり、島によって何をやっているかが違いますし、その中に行って探せば、おそらく持続可能な開発を求めるのであれば、望ましいというようなものもあるかもしれませんが、ここで全体的に考えてみたいと思います。

瀬戸内海はこの景観が主な資源です。私が日本に来たときに、先程泳ぐ話をしたのですが、ドイツ人は泳ぐことがとても好きなのですね。ですから海があればまず泳ぐのですが、瀬戸内海でなぜみんなそんなに泳がないのか、しかも7月にならないと泳がないのかとか、ビーチに行ってもそのビーチの前にコンクリートの防波堤があったり、ごみがたくさん置いてあったり、なぜこうなっているのだという単純な疑問から、瀬戸内海の観光開発に興味を持ち始めたのが現実です。

欧米で見る海岸リゾートというのは、先程も少し触れましたが、とにかくにぎわっている。たくさん人がいる。ビーチが中心になっていて、基本的に自然型と都市型があるのですが、つまりビーチだけがあってそのビーチの周りに自然がいっぱいあって、そこで1日過ごすタイプと、ビーチがあってその周りに町が成り立っていて、土産店とかアイスクリームが買える店とか映画館とか、そういう施設がたくさん建っているところと、基本的に両方の形態があります。

しかし、瀬戸内海にはそれがあまりありません。10年前の話ですから今は少し変わってきていますが、海水浴場は仮の施設が夏の間にもちよこっと出てくるぐらいのような状況なので、地中海やエーゲ海によく例えられるのですが、レジャーについての利用は全然違います。マリンレジャーを見ても、釣りは確かに盛んですが、ヨットやモーターボート、海上バイクなどにはありますが、ヨーロッパのそういうところと比べると非常に少ないというのが現状です。ですから、瀬戸内海の主な資源は、遊べる海よりもすばらしい景観ということだと思います。もちろんその中に入っている歴史的な、文化的な遺産もあると思います。

瀬戸内海は、やはりこういう面だけではなく、その観光対象は確かにこういう自然美です。しかし、こういう風景もよく見かけます。瀬戸内海は基本的に太平洋ベルトに位置しているだけに産業開発が進んでいます。それで、自然海岸が残っている割合は全国に比べて少ないです。測り方によりませんが、全国の場合は自然海岸は半分ぐらいなのに対して、瀬戸内海は自然海岸が37%といわれていて、ほかに埋め立て地とかこのような工業地で海岸に人が近づけないような割合も非常に高いです。水も赤潮の問題などがあり、60年代に比べるときれいにはなっていますが、最近クラゲの増加も、ただの温暖化ではなくてコ

ンクリートの海岸が増えたせいなのかとか、生態系の変化などといろいろいわれています。

私はヨーロッパ人だからこう見ているのだろうと思い、一度、客観的に測ろうとしました。しまなみ海道を自転車で走って2キロごとに前と右と左の写真を撮りました。つまり自分の判断で写真を撮ると、非常にきれいなところと、このように非常にひどいところしか撮らないからです。そうすると、その116枚のうち自然と海しか写っていない写真は18.4%、工場が写っている写真が13.2%、コンクリートの海岸線が入っていた写真が16.7%、電信柱の入った写真が51.8%、コンクリートの道路の壁などが入っているのが13.2%などのような数値を得ました。つまり、走っている中の2割弱だけが自然だったのです。ですから瀬戸内海はやはり人口密度が高い。土地がかなりいろいろなことに利用されているところであるということが、まずいえると思います。このような風景をよく見かけます。

そこで、では総合的な観光開発を考える場合は、先程言いましたような持続可能な観光開発のわりあい厳しい原則を使うと不可能だということになってしまうのではないかとことも考えられますので、もう少し総合的な視点を取り入れたいと思います。もちろん、観光を考えるときは環境への配慮、地域コミュニティの決定権を重視すること。もう1つは、観光が産業として持続性がある、つまり観光地域の経済的な自立と観光とほかの経済的、社会的活動の調整。この4点を配慮した観光開発は総合的である、望ましいといえるのではないかと思います。ですから、この上の2つは持続可能な観光開発の要求です。それに経済的な自立とほかの地域の活動との調整をさらに視点として取り入れたいと思います。

これから事例を見たいと思いますが、どういうところを見るかということ、まずその観光政策の特徴、つまりどれだけ総合的であるかということです。そして観光産業とその担い手と、住民から見た観光開発。住民の決定権を考える場合は、まず住民が観光をどう見ているかということ調べる必要があります。

事例として取り上げたいのが瀬戸田町、しまなみ海道沿いで一番観光施設がそろっているところです。それと広島県の宮島町、世界遺産で、日本ではもう昔から有名なところですね。この2つの島の現在の観光の状況を見て、これは総合的な観光地になっているかどうか、どのような方向に進めれば持続的になるかということ少し考えてみたいと思います。

なぜこの2つを選んだかということ、瀬戸内海に島がたくさんありますが、観光が重要な経済の一部になっているところはそう多くはありません。ですから、広島ではこの2つが一番主だと思います。

まず瀬戸田町の状況を見たいと思います。瀬戸田町に行ったことのある方？ 1人。名前を聞いたことがある方？ 耕三寺(こうさんじ)という名前を聞いたことがある方？ 西の日光です。やはり、ここまでは有名ではないですね(笑)。

瀬戸田町に耕三寺というお寺があります。お寺とっていいの、テーマパークといっ



ていいのか少し迷うような存在です。瀬戸田出身の鉄鋼業で大阪でお金持ちになった方が、自分の母への思いのために、瀬戸田に戻って、仏教の有名な建物の復元とはいえないけれども、偽物ともいえないものを造りました。それが耕三寺です。ですから耕三寺を訪れる人はなぜ訪れるかという、1つは非常に仏像など宝物をたくさん集めています。いろいろな仏教の有名な建物を一度で見ることができます。本物ではないのですがよく似ている。そしてそのお母さんへの思いということで訪れる客が多いです。そのお寺を中心に瀬戸田町の観光が成り立ちました。

これは観光客数で、縦は1000人ですね。ですから、日本の第1次レジャーブームといわれているときに、まず100万人まで伸びました。それが80年代に入ると落ちてしまうのです。それで対策を考えました。町には一応耕三寺のために宿泊施設もあり、商店街がありました。島ですから、その商店街が港から耕三寺に結びついていく商店街でした。ですから、観光客が来なくなると一部の住民が困る。それで、観光をこれから産業として、あるいは島に刺激を与えるものとして維持させたいならば、積極的な観光政策が必要だということを決めて、あとで説明する開発を行った結果、伸びていきます。

まず、しまなみ海道の本州側の橋がここでできます。ここがしまなみ海道の全通です。ですから、一時300万人まで観光客が伸び、これは宮島と同じレベルになりました。しかし、次の年はすぐに半減して、今はほとんど元のレベルに戻っています。日本の観光の中で、一つの全然持続的でない傾向はそのブーム現象です。つまり、一気にたくさんお客さんが来る。

これは4番目の橋ですから、その前に鳴門大橋が開通し、瀬戸大橋が開通し、明石大橋が開通した。ですからこうなのだという事は、島の人たちは前からわかってきたのですね。それでもやはりこの年のためにこれだけのレストランを造って、これだけの駐車場を造ってというような、ある程度の開発をしなければいけません。それが全部1年でまた使わなくなってしまうと、やはり非常にむだなところがあります。

瀬戸田町の場合は、日本でよくあるかたちですが、町長を中心に積極的に観光開発を進めました。1つは海水浴場を造りました。一応人工ビーチですが、施設は年間を通じて経営しています。その地域にとっては初めてだったのですが、今は周辺にいくつかそういう海水浴場があります。

この事業は、もともと漁業を進めるために海岸の改善などを考えていたものをレジャーという方向へ持ってきました。その結果、若い人、観光客を誘致することにまず成功したといえます。もう1つの仕組みとしては、野外アートで、彫刻者を誘ってピエンナーレとかたちで2年に1回行われています。全部で何回か行って、島全体の17か所にこのような彫刻というか野外アートが置いてあります。アーティストに島のどこを選んでもいい、何を置いてもいいというような条件でお金を少し出して造ってもらいました。

基本的に海をテーマにしたものが非常に多いです。合うかどうかは好みの問題で、例えばこれは色がどうかと私は思うのですが(笑)、祭りに利用するのです。この上に潮が入っ

てくると、秋に月見の祭りをやって、その上で太鼓をしたりするらしいので、かなり利用されているという意味で、しかも海と関係しているものなのでおもしろい仕組みだといえます。

そしてもう1つ、日本画家の平山郁夫は瀬戸田出身なので、瀬戸田の住民の中で長い間博物館を造りたいという要望があり、それを実現しました。その建物は一応和風にしました。

そして最後にできたのが、シトラスパークというテーマパークです。それは県との共同プロジェクトで、元は農業と観光の両方を進めることで研究施設なども誘致する予定でした。この下に、これはしまなみ的高速道路、ここの部分はまだ今工事中です。ですから、このシトラスパークという施設は、もう町から島の反対のところに立地していて、完全に観光客向けです。ほかの3つの施設は、アートはみんないつも見ていて、海岸では住民は冬の間はそのスポーツ施設、あるいはレストランを利用している。そして平山美術館は人が外から来たら必ず連れて行く。瀬戸田の観光資源の中で住民が見て、耕三寺に次いで一番主な資源だといわれています。ですから、このように住民が利用するものと、住民があまり関係ないような施設の両方を造っています。

このように造っていったことで観光客が増えて、しまなみ海道が開通したときには瀬戸田に一番観光客が来ました。しかし、今は特にシトラスパークの方はかなり観光客が減ってきて、経営が難しい面があるそうです。

今度は宮島の方を見たいのですが、宮島はもう長い歴史の中で成り立ってきた観光地なので、複合的な観光地です。文化遺産がある。島の反対側にマリレジャーを楽しめる海水浴場がある。山は最近、広島からの日帰りでハイキングが非常に盛んです。水族館という観光施設、子どもが喜ぶような観光施設も一応はあります。

もう少し宮島の多様な魅力を見ますと、外国人から見ると魅力としては、その町並みがあります。宮島は島全体が国立公園なので、町に非常に厳しい規制がかかっている、宿泊施設はある程度大きいものができるのですが、かなり制限されています。その規制がかかっていることに対して住民がどう思うかという、町にとっては必要だというのは半分近くが認めます。自分にとってはやむをえないというのが半分、誇りに思っているという答えは22%でした。

これからちょこちょこ住民がこう言っているのだという話が出てきますが、宮島と瀬戸田で住民に対するアンケートをしました。宮島の方は広島大学の浅野敏久先生が行って全世帯に送り、瀬戸田の場合は偶然に選択した500世帯に送って300ぐらいの回答が返ってきました。その結果をこれから少しずつ出します。

宮島は世界遺産です。世界遺産としての魅力ですが、これは世界遺産の指定を受けている島の部分です。そしてこういう野外レジャーというか、外に座ってのんびりできるというところ。ですから、外国人から見ると、日本の多くの観光地は1時間か2時間見れば終わるのですが、宮島はこのような歩く場所がある、そして細かい町並みとかがある。

わりあい時間の過ごせる、多様性のある観光地である。それは、ある意味で持続可能なものでもあると思います。1か所で長く過ごせる。しかもそのために特別にバスに乗ってどこかに行くとか、いろいろな資源を利用するなどというわけではなく、そのまま島にいられるようなところがあります。

宮島の場合は、町自体はそれほど積極的に観光政策にかかわっていません。総合的な開発の場合は住民の視点を取り入れる必要があると先程言いましたが、住民の評価を見ますと、瀬戸田町の人には問題があると言う人の方が多いのですが、よくやっていると言う人もいます。宮島の場合は、町の観光政策に問題があると言う人がたくさんいます。それはなぜかという、ここは経済的な持続性が出てきます。宮島は最近観光客が減っています。それは日本の国内のほとんどどこでもそうで、海外との競争です。それに対して町はなんとかしなければいけないのですが、何も動いていないということに住民が不満を持っているといえます。

町の予算を今後どのように使ってほしいかという質問に対しては、宮島の方は積極的な観光振興をしてほしいというのが圧倒的に多いです。瀬戸田の場合は福祉や教育を重視してほしい。つまり宮島の場合は、あとで見ますが、観光がもう産業の基盤です。ですから総合的な考え方というのは、宮島の場合は島全体がほとんど観光ということになっているのでこうなっていて、瀬戸田の場合は、やはり観光政策はいいのだけれど、もっと全体のことを考えてほしいということが読みとれると思います。

ではここで、観光産業の将来性、持続性を見てみます。まず構造を見ますと、宮島の場合は観光産業が非常に大きなウェイトを占めています。全部を足すと住民の8割ぐらいは観光に関係し、残りの2割はおそらく役場などだと思います。瀬戸田の場合は、小売・商店街が主で、宿泊施設は事業者に占める割合としてはそれほど大きなウェイトを占めていません。

このような観光産業をだれが担うかによって、観光開発についての決定権が地元にあるか、あるいはよそにあるかが決まってくるのです。先程言いましたように、国際観光の場合はよく問題にされているのが、観光産業の企業が外部から来ている場合が多いということです。それによって、決定権が住民にない。その点で、特に瀬戸内海の宮島や瀬戸田の観光はたまたまそうなっているのですが、非常に持続性の一つの視点を取り入れているというか、やはりほとんどの施設が中・小規模です。そして地元の資本が中心です。ですから、そういうことを考えると一応決定権が地元にあるということになります。

ただ、宮島町の場合は、町自体、行政自体があまり観光開発で動いていないの



ですが、宿泊施設の経営者はかなり積極的な役割を果たしていて、それぞれ自分でアイデアを持っているのです。そのアイデアの中には、もっと環境を重視しようという考え方もあり、1人の旅館の経営者は、やはりエコツーリズムを考えて、山のボランティアガイドシステムを充実化させるとか、もう1人はイタリアのベネチアに行って、やはり宮島も車を入れないような方針に変えるべきだとか、要するに観光産業の担い手の中でそういう新しい環境に対するアイデアが少し入ってきていて、それはこれから少し実現できるのではないかといえます。

しかし、宮島の場合はやはり規制がかかっていますから、乱開発がされていないという面と、問題としては商店街の場合は高齢化が進んでいて、土産店がたくさんではないが衰退していった、そこに最近大手が進出してきたことがあります。京都に、全国で土産店を買い取って店を出している業者が1つあるのですが、最近観光地の調査をするときに必ずそれに出会うのです。そういうものが入ってくると、少し地域性が薄れてくると、地元にあった決定権が少し流れてしまう面があります。

瀬戸田町の場合は、やはり規模としては宿泊業は小さいのですが、一応若手による新しい施設の増設も見られます。ペンションを造るとか、アメリカのキャンプ場の仕組みを取り入れて、ログハウスを利用したキャンプ場を造る人とか、少しそこで将来的に動いている面があります。

しかし、瀬戸田の場合は、やはりしまなみ海道の影響が非常に強かったのです。しまなみが開通する前に大きなレストランが2件新しくできました。そのうち1つは、すでに今休業中です。それは、ブーム現象にどう対応するかということに追われて、やっと対応できたもので、それは商店街や商工会のメンバーが共同でお金を出し合って造ったレストランと土産店でした。残った方は、フェリー会社がフェリーがなくなったためにもらった補助金を利用して造ったものです。しかし、どちらも地元資本です。

瀬戸田の場合、商店街の状況は本当に危機的で、今、このような風景になっています。なぜかという、10年前にすでに本州と橋がつながったので、港からお寺に歩く人が減っているのです。というか、ほとんどいないのです。そうすると、商店街沿いにあった店、一部は生活の店もあるのですが、観光客はまず通らない。住民も駐車場のある大型の店舗のスーパーに変わっていきます。ですから、ここは交通が住民の交通も観光客の交通も全部車に変わったことによって、商店街というものも魅力を完全に失っていった、その将来を考えるには、なんとか島は船で来ることだという新しい魅力を生み出さなければ、この人通りは増えないと思います。

住民が、観光客によってどのように迷惑されているかということもアンケートで聞いてみましたが、交通渋滞が瀬戸田の場合が一番主でした。それはしまなみ海道が開通したときなのでそうなっていて、宮島の場合のごみですね。ですから、そういう問題にどう対応するかということがこれからの一つの課題になると思います。

住民は島の観光資源をどのように評価して、これからの開発はどのように進めてほしい

かと聞いたところ、宮島の場合はまず山の自然を高く評価し、これが宮島の重要な資源だと評価しました。それに対して強い保存意識があり、各資源に対して保存すべき、そしてソフトな事業、例えばガイドをつけるなどで生かすべき、あるいはちょっとした歩道の整備などをするべき、あるいは新しい施設を開発すべきという4つの選択肢を与えたのですが、宮島の場合は、山に対してはとにかく保存の希望が強く、保存すべき、またはガイドをつけるぐらいというものを足すと、6割ぐらいの人がその方針を望ましいとしていました。

瀬戸田の場合は、一番資源として高く評価されたのが平山美術館でした。施設をたくさん造ったが、これから経営するにあたって、財政に見合った経営をしてほしい。無理してほしいくない。年齢層によって意識の差がかなりありました。どういう差かというと、まず中年層の方が、その無理のない経営を強く望んでいたのと、山の自然に対しては保全の関心が強かった。若い人たちは、海に対しても山に対しても、保存と開発に分かれていた。保存を望む人が多かったが、一部は新しいレジャー施設の開発も必要だと言う人も結構いました。

瀬戸田の場合は、基本的に海に対して保存意識が高く、宮島は山に対しての保存意識が高かったのがおもしろい結果でした。全体的に、自然資源に対して、住民から見るとそれほど新しい施設やレジャー施設を造ることを望んでいないということがこの調査でわかりました。

ここの資料にはまだ入れていないのですが、ほかに、住民だけではなく、瀬戸内海を利用している人たちはどう思うか。例えば、マリンレジャーを楽しんでいる人たちは今後の瀬戸内海の開発がどの方向に向かってほしいかというアンケートも取りましたが、特にヨットの人に聞いたところでは、瀬戸内海の今後の発展としては、自然保護を重視すべきだと答えた人の割合が圧倒的に多かったです。ですから、今後の方向としては自然を生かすことに興味を持つ人は多いが、具体的に自然を生かす、自然を保存するとはどういうことかとなると、それを各町で具体的に各事業の場合に考える必要があるといえます。

今後の課題として、瀬戸内海の総合的な開発として考える場合はいくつか出せます。1つは、今後の方向を考える住民とはだれなのかということがまずあります。瀬戸内海の島は非常に高齢化が進んでいます。これはしまなみ海道沿いの各島の高齢化、上のオレンジの部分は高齢者の割合です。そして人口減少。特に真ん中の方、大三島とか、橋の架かっていないしまなみの周辺の弓削島などは、高齢化と人口の減少が進んでいます。こうなると、だれが新しいことを考え出すのか。今の調査の中に、いくつかのテーマについて、若い人と高齢者、あるいは中年層の間に差が見られました。そういう考え方の差をどのように調整していくかというような問題があると思います。ですから、住民に決定権といっても、その住民とはだれかというのが課題としてあります。

もう1つは、総合性のある組織づくりが必要です。宮島の場合は特に商店街の組合や旅館組合、観光協会があるような状況ですと、総合的な発想が生み出せないということで、

九州の有名な湯布院がありますが、そこは今、観光協会と旅館組合をくっつけて、新しい総合的な観光を考える組織を作りだしたのですが、その方向に動かなければ、持続性を考える場合は広い視野が必要なので、各業界の中ではとても考え出せないのです。

そして交通問題です。瀬戸田の場合は渋滞の問題、あるいは車で移動するようになると、前に海に向かっていて町がなくなってしまう。全体的に考えると、持続可能な観光というのは、できるだけ車を使わないような仕組みを作る、船の魅力を生み出す必要が一つの今後の瀬戸内海の課題だと思います。

そして観光客は、やはり短期滞在をする、通過性が増えている、見るのが主というのではなく、もっと住民と訪ねる人とかかわりができるように、やはり宮島のように気軽に山に登るために行く島とか、このレジャーへの方向転換も必要だと思います。その中でどうやって保存と生活との調整を行うかというのが一番重要な課題だと思います。将来的に、もっとこのような風景が瀬戸内海で見えるような方向かもしれません。

以上で、最後の話はちょっと行ったり来たりしていましたが、残りの時間で少し質問を受けたいと思います。

## 質疑応答

(質問者1) 地理学教室の斎藤です。今、宮島と瀬戸田町の観光開発の概要について教えてもらったのですが、町としての観光の方向性と、あと広島県の考えている観光の方向性というものの違いとか、共通する部分というものがあれば教えてほしいのですが。

(フंक) 私は最近広島県の観光政策について、最近の動きをあまり把握していません。すみません。全体としては、広島県も一応リゾート計画というのを打ち出してはいたのですが、それがほとんど実現されていません。瀬戸内海の周辺の県は大体そうです。

一つの方向としては、農業と観光を結びつけるために瀬戸田に造ったシトラスパークと、2つの隣の島でも似たような施設を造りました。それがあったのですが、そこは結局県と町、民間の第三セクターになっているのですが、内容的に見ますと、プロフェッショナルではないのです。ですから、お客さんがそんなに集まっていないのは、そのつくり方にも問題があったかと思います。

そのあとの最近の方向は、私は今それほど詳しくないです。すみません。

(質問者1) その総合的な観光開発というものを、先生はするべきだということですね。ということは、やはり県と町というものがもっと協力した方がいいということになるのでしょうか。

(フク) いや、必ずしもそうとは言えません。まず、町の範囲で動くのは十分だと思います。どちらかという、県よりも隣の町とかほかの島と連携することの方が重要だと思います。この間、ある島で、御手洗という町で、町並み見学を案内するボランティアガイドのグループがいて、彼らは一つの古い建物を生かして、潮待ち館という名前をつけてやっているのです。瀬戸田町でも同じことをやっているのですが、それを知らないのです。ですから、もっとお互いの同じ立場にいる島、町との連携の方が、県との連携よりは、私は今のところでは大事だと思います。

(質問者2) 地域振興研究所の堀田と申します。非常に興味深い話をありがとうございました。

最後の方のまとめの中で、先生の今後の課題として、「住民とは」というようなことをおっしゃいましたが、先生のお考えの住民とはどのようなことを少しイメージされているのか、教えていただければと思いますが。

(フク) 少し難しいところですが、島というのは非常に狭い社会ですよ。日本のそういう地方の狭い社会の中ですと、やはり年上の方が、ウェイトが高いとか決定権があるのです。瀬戸田の話で聞いたところでは、若い人たちはもっと商店街の空き店舗を生かしたい。しかしすでにそこで店を持っている方々は年をとって、動くのがしんどいという面もある。そういう面があるのなら勝手にやりなさいと言えばいいのですが、動けないような雰囲気になっているのです。ここで私が言いたいのは、地域の中での意思決定はどうなっているのか、それは本当にそこに活力を生かせるようなものになっているかということだったのです。

(質問者2) もう1つ聞きたいのですが、今後の問題点ということで、高齢化と過疎化のことをおっしゃいました。日本の社会においては、高齢化や過疎化については、いろいろな経済面や地域マネジメント、運営等について非常に重要な問題を含んでいるということで、全国至るところで同じような悩みを抱えているのですが、ドイツでもやはり同じような観点で高齢化と少子化、あるいは過疎化の問題を考えておられるのでしょうか。

(フク) 高齢化と少子化はあります。日本ほど急ではないと思います。もう少しゆっくりきていると思いますが、過疎化は今まではなかったのです。旧東ドイツと統一して、今は、その旧東ドイツの地域はどうしても経済が復活しないということで初めて過疎化が起こっていて、それにどう対応するかということにかなり迷っています。

なぜドイツで過疎化が起らなかったかという、もちろん地形の関係などもあるのですが、わりあい積極的に地域計画の中で、小さい町にもいろいろな中心的な機能を持たせるような仕組みを作っていたのです。確かに一部には、もうバスが走らない、店が隣の村

まで行ってもないというところがあるのですが、特に交通の面で、最近そこを見直して、やはり利用者は少なくとも公共交通手段を提供する、ある程度行政が負担する。そういう基本的な機能を保つことに力を入れています。

日本の場合ですと、機能よりもハードに力を入れているような面がありますので、そこは少し違いがあると思います。

(質問者2) 意思決定の問題で、そこに住んでいる住民の意思が反映されることが大切だと先生はおっしゃるのですが、そこに住んでいる住民だけの意思が反映されるということに対して、問題というものは生じてこないのでしょうか。

(フंक) それはたくさんあります。持続可能な開発で一番よく問題にされているのがそこです。ですから、先程ドイツの島の話を少しいたしました。そこに土地を持っている人はやはり土地を売って建物を建てたい。でも自然保護などを考えると、やはり開発はある程度制限した方がいい。それが典型的な問題ですね。ですから、「住民だけで」というのは問題があると思います。やはり全体的な自然保全の立場とか、または利用者の立場とかの決定への参加も必要だと思います。住民の間には利害関係があるというのはあたりまえのことで、それを調整する必要がどこかにありますから。

(質問者3) 地理学研究室の金銀淑と申します。韓国から来ている留学生なのですが、最近、韓国でも持続可能な観光開発という概念がはやっていて、あまり研究が進められていない状態なのですが、今の話を聞くと、持続可能な観光開発ということは、私の予想では短期的な経済的効果よりも、長期的な経済的効果があるので、経済的に余裕のある地域あるいは国の場合は、それを取り入れることがしやすいかもしれませんが、そうではない途上国の場合は、やはりテーマパークなど、一気に経済的な効果を得られるような観光開発になると思います。それに対してはどのように思っていますか。

(フंक) 瀬戸内海のしまなみ海道の事例で見ると、それで失敗したのです。要するに橋が架かったら人がたくさん来る。テーマパークを造ればそこに人が来るという発想は、淡路島もそうですし、瀬戸田のシトラスパークなどもそうですが、それは結局長期的な観光開発につながらないのです。長期的な観光開発は1つの施設とかに頼っても成り立たない。ですから長期的に考え、長期的プラス広く考える必要があります。

今言ったテーマが一番問題になるのが、やはり世界遺産とか自然保護地域などの場合です。その場合は、そこを訪ねる観光客は自然を求めている。しかし地元の住民は、例えばそこで農業をやるとか、ほかの経済活動をやりたいという面もある。ですから、そういう問題に対しては原則はないと思います。ただ、施設型の観光は総合的でも長期的でもないということだけはいえると思います。



(質問者3) それから、持続可能な観光開発ができる対象というか、そのようになるとしたら、とりあえず自然が豊かであって、歴史的なメリットがあり、そこからすぐに経済的な効果が得られないので、その地域の基盤産業は観光産業ではない地域の方がいいのですか。どのような地域が持続可能な観光開発政策を取れば効果的だと思いますか。

(フंक) (笑)それが難しい質問ですね。ですから、その地域によって、何が持続可能な観光開発かというのは違うわけです。自然が豊かな地域の場合は、やはり自然保護を重視して観光開発を考える。瀬戸内海の場合は、自然はまあまあ豊かですが、かなり工業化されていて、しかしその工業が今衰退している。では、例えばその衰退した造船所などを再利用することの方が、新しい場所をあちこちで開発するよりも持続可能だというか、環境の視点から考えて望ましいとか、そういうのは地域によって違うし、施設を絶対造るなということは私も言っていないです。施設を造るなら、施設自体がある程度環境に配慮した施設。例えば運営のうえで、どうやってできるだけ資源を利用しない、エネルギーを利用しないかというような施設を造る。やはり施設、テーマパークへ行きたい人はたくさんいますから、それを造らないとは言えない。ですから、何が持続可能なのかというのは場所によって違うのです。

(質問者4) 統計についてお伺いしますが、ドイツでは14~19歳、若い方の旅行経験が日本に比べて非常に多いのですが、これは小さいときに家族と一緒に旅行するようなかたちなのか、またはユースホステルのような何らかの団体のようなものに参加して旅行するのが多いのか、そういう面がもしわかれば教えてください。

(フंक) ここに出ている数値は14~19歳なので、大体15歳あたりまでは親と一緒に動きます。そのあと友達と行ったり、あるいはユースホステルに行ったりとか、教会のグループや青年センターのグループなどで移動しますから、両方だと思います。

なぜ日本より多いかという点、ドイツですと夏休みは夏休みです。夏休みの間は塾もない、登校日もない、何もなし。6週間は休みですから学校へ行きません。ですからそういう旅行ができるのですね。そこにはかなり大きな違いがあると思います。

(文学部 神谷教授) 私の方から少しよろしいですか。観光でドイツと日本の話だったのですが、最初の方で、いろいろドイツの方が持続可能な条件があるとかないとかいろいろ話がありました。過疎地域などということを見ると、この持続可能な観光開発ですとたぶん、やはり最初の定義で、わりと経済的に豊かな地域から貧しい地域、不利な地域ということだったと思うのです。このような持続可能な観光開発がある程度ドイツで成り立っているという背景の部分に、もしかするとEUの農業政策で所得保障の部分があると思います。それによって、つまり経済的には農業だけでは成り立たなくても人がある程度

住み続けているという部分もあると思いますが、その影響というのはどの程度なのでしょう。

(フク) それはかなり大きいと思います。先程事例として出した、村全体で自然農業に切り替えたところですが、あそこは全員EUの補助金をもらっています。普通はEUの補助金を農家は個人で申し込みますが、そこを団体で申し込んで、EUの補助金と、あとは州からその景観維持のための補助金を面積あたりでもらいます。ですから、ヨーロッパの場合は、自然農業に切り替えるときにEUから補助金が出ますね。国によってまたいろいろなシステムがありますので、それがかなり大きな支えになっていると思います。

(司会) ということは、今、ちょうど日本も少しずつEUのかたちの所得保障の補助金に農業を変え、林業などもこれからレンジャーに所得保障としてお金をあげようというような話も出ています。そうすると、今後は意外と日本でも、こうした条件が不利な地域でも、このような長期滞在型の観光開発の経済的に成り立ちうる余地が大きくなると思われませんか。

(フク) 長期滞在型は、日本では休暇のシステムを変えなければ普及しません。ですから、やはり労働時間の問題は、数値では言えませんが、私が就職した学生から聞いている話では、さらにその状況が今、経済危機で深刻化してきていますし、休暇が取れない、残業が増えている。しかもその残業に対してはお金が出ない。ですから、長期滞在がこのような条件で成り立たないと思います。

国土交通省のホームページに行くと、最近3日間休暇を取りましょうというキャンペーンをしているのですが、キャンペーンを労働者に対してやってもしかたがないのです。ですから、その要求が社会的に出なければ、日本の場合は、まずそれが日本の観光地の一番基本的な問題です。

(質問者5) 私は都市計画のプランナーをしております、\*宮本\*と申します。先生がお話しされた一番最初のあたりに、キャリングキャパシティというとても興味深いお話をいただいたのですが、そのキャリングキャパシティを決めるのはだれなのか。私は、住民だけではないと思うのですが、住民を中心としたその地域だと思うのです。ただ、日本の場合はそれほど住民の意識が高くなっているかというところでもなく、ドイツがなぜそのようにうまくいっているかというところ、きっと住民の意識が高く、行政との関係などもある意味いい関係を保っている。しかし日本の場合は、行政はずっとお上というか対等ではなかったという時代がとて長く、最近やっと市民参加ということで、いろいろなことに対して市民が参加するようになったのではないかと思うのです。

そういった意識が徐々に上がっていく中で、けれども例えば観光客はどんどん来てくだ

さいと。観光地はどこもそうだと思います。たくさん来るのがいいことなのだと。そういう中で、ある意味規制をかけていく。キャパシティを抑えていくというようなことをするのは、今の時点ではだれがするのがいいのかなというところがとても興味深いのですが、教えてください。

(フク) そういう観光地の場合は、例えばこれ以上はスキー場を造らないとか、そういう決定ですよ。それを出すには、質を保つということがありますね。ですから観光客層がいろいろあります。別にスキー場がたくさんあり、人がわーっと行くというのがいい人と、そうではなくてちょっと静かなところがいい人と両方いるのです。自分の観光地としてのプロフィールを考えるときは、やはりそれをある程度決めて、ではうちに来る客はどちらかという長期滞在に来る、ちょっと高齢者であって、まあまあお金がある。しかし、わいわいする人がたくさんいるのは好ましくないということを考えるならば、これ以上スキー場や新しいホテルを建てない方が、かえって今の客層を維持するために大事だという理由で決定する場合が結構あると思いますね。